

大曾根章介 堀内秀晃
久保田 淳 三木紀人
檜谷昭彦 山口明穂
編集

説話文学

第三卷

明治書院

編者

大曾根 章 介

久保田 淳

檜 谷 昭 彦

堀 内 秀 晃

三 木 紀 人

山 口 明 穂

研究資料日本古典文学

第三卷 説話文学

定価 3,900 円

昭和 59 年 1 月 25 日 初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

長野県長野市中御所町 2-30

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明治書院

〒101 東京都千代田区神田錦町1-16

電話 東京 (292) 3 7 4 1 (代)

振替口座 東京 3-4 9 9 1

© S. miki 1984

3391-26103-8305 製本 星共社

刊行の言葉

聖徳太子が摂政となり、十七条憲法の制定を初めとして種々の文化政策を打ち出した七世紀初頭から数えても、ほぼ十四世紀近くの歴史を有する日本文学の流れを一望の下に収めることは至難のわざである。しかも、多極化する国際社会にあつて日本が文化国家としての役割を全うするに際して、まず自国の文化伝統への認識と省察を深めることは、今日における急務であろう。「汝自身を知れ」という言葉は常に真理である。自らの由つて来た文化・文学に対する無関心さが進行しつつある現代において、特にこのことを痛感せざるをえない。

このような問題意識のもと、蒼古の歴史を有する日本文学と技術社会の先端にあるわれわれ現代人との架橋ともなるべき、平易でしかも正確な古典文学解題書を目指して、ここに本書を編んだ。既刊の姉妹編としての『研究資料現代日本文学』にならない、ジャンル別の編成とし、主要古典文学作品並びに作家の詳細な解題とともに、主要作品については原文を豊富に引用し、注解をも加えることによって、文学事典類では期待しがたい、文学鑑賞講座的側面をも具備するように努めた。さらに直接それら古典に触れようとする人々のために、参考文献、翻刻、最近の研究動向など、最新の情報を提供しようと試みた。

編者達のおおけない望みは、実際の教育の場に立つ方々の教材研究資料として活用して頂くことによつて、学生・生徒が日本古典文学の豊かな流れの具体的な姿に触れ、その一部をなりとも味わう機縁となること、そしてまた、国文学・国語学研究者にとつては、各領域における今後のより深められた研究のための、ささやかながらも確乎たる足場を提供することにある。その意図に比して達成は必ずしも十全であるとは言いがたいであるが、読者諸氏の御理解を得て、本書が末長く活用されることを願つてやまない。

昭和五十八年三月

凡 例

一、本巻は、『研究資料日本古典文学』の第三巻、説話文学である。本巻では上代から近世までの説話文学を採り上げた。項目は作品を中心としたが、適宜、概説的な欄および事項に関する項目やコラムを設けて参考にした。

一、作品の配列は、年代順を原則とした。

一、各作品についての解説は、〈概括〉〈成立および概観〉〈内容〉〈参考文献〉を柱とし、主要作品については、作者についても具体的に述べ、さらに作品の〈本文〉を掲げ、通釈・語釈・解説を施した。それらの作品については、〈研究の動向〉をも加えた。

一、引用・出典の明示や、発行所・発行年の蔽密を期した。又、原典よりの引用は、「」を付し、原典どおりの仮名遣いを原則とした。

一、新聞・雑誌・単行本名は『』で示し、その他は「」とした。

目次

刊行の言葉

凡例

説話と説話文学

上代の説話

中古の説話

日本霊異記

日本感霊録

狂言綺語

三宝松

地藏菩薩靈驗記

往生伝

日本往生極楽記

大日本国法華経験記

本朝神仙伝

統本朝往生伝

江談抄

百座法談抄

注好選

今昔物語集

古本説話集

打聞集

打聞と聞書

中外抄

富家語

唐物語

中世の説話

貴族説話の伝承

仏教説話

唱導文芸

縁起物

本地物

絵卷

宝物集

蒙求和歌

古事談

発心集

長谷寺靈験記

統古事談

宇治拾遺物語

閑居友

世継物語……………三二

教訓抄……………三三

今物語……………三三

十訓抄……………三六

古今著聞集……………三七

私聚百因縁集……………三五

撰集抄……………三五

観音利益集……………三七〇

唐鏡……………三七

八幡愚童訓……………三七二

沙石集……………三七三

雑談集……………三六八

真言伝……………三九六

石山寺縁起……………三九七

吉野拾遺……………三九八

神道集……………三九九

三國伝記……………三〇一

語園……………三〇三

東斎隨筆……………三〇四

近世の説話……………三〇五

近世翻案物仮名草子……………三〇七

本朝神社考……………三〇八

本朝列女伝……………三〇九

大倭二十四孝……………三〇〇

新語園……………三一

本朝故事因縁集……………三二

和歌威徳物語……………三三

死靈解脱物語聞書……………三四

本朝怪談故事……………三五

広益俗説弁……………三六

本朝俗諺志……………三七

新著聞集……………三八

大岡政談……………三〇

巻頭の秘話……………二〇 永観二、三年……………二六 今は昔……………二二 吉祥天女との恋……………二五 巡り物語……………二五 絵解……………二九 長明の

出家……………一四 隣の爺……………二〇八 隨身……………三五 知られざる清盛……………三三 鬼……………二五 話末評語……………三九 和尚と小僧……………三九 説

経師……………二五 太平記読みと講釈……………三三

説話と説話文学

国文学研究の対象として説話・説話文学が扱われるようになってのは明治末年ころからのことと思われるが、文献上では芳賀矢一が『攷証今昔物語・天竺震旦部』(大2)で「今昔物語は我が国最古最貴の説話集」(凡例)「我が国唯一の古説話集」(序論)としたのが最も古く、野村八良の『鎌倉時代文学新論』(大11)になると『宇治拾遺物語』『古事談』『今物語』『十訓抄』『古今著聞集』などが「説話文学」という一章にまとめて論じられるほどのはっきりした立場が見られるようになっていく。

ところが、芳賀にしる野村にしる、あるいは同じころに『今昔物語集』を「説話文学」であるとした『今昔物語集の新研究』(大12)の坂井衡平にしる、この分野の研究に先鞭をつけた人々の誰もが、説話・説話文学なるジャンルの概念を明確にしていない。国文学研究界が、厳密な概念の規定をしないまま用語を先行させてしまったのは、当時すでに宗教学や神話学の分野で説話という語が用いられていたのに安易に寄りかかったからであろうが、その場合の説話とは、ただのはなしあるいは伝えられたはなしといった漠然とした意味の語であって、とうてい文学史上にジャンルを設定するに足るほどの固有性を主張しうるものではない。

そのような語を無批判にジャンル名として用いたという当初の杜撰さが今日の概念の曖昧さにも影響を及ぼしているといえようが、その混沌から脱け出るためには、はなし・伝えられたはなしという民族的な語としての説話とは別の次元での、国文学のジ

ャンルにおける説話・説話文学の概念が明らかにされなければならない。国文学サイドでも説話という語を用いるとなると、民族的な語として従来通用していた説話の語との相違が特に分明にされなければならぬが、国文学のジャンルとしての説話とは、説話集を構成している単位作品に代表されるところの、文学的営為の所産としてある作品のことであるとすべきである。また説話文学とは、説話を文学的内質に関して論ずる場合に用語にほかならない。右の考え方は、「和歌文学」という語が文学作品である(和歌)をその文学的内質に関して論ずる場合の用語であるという例をあげるまでもなく、国文学研究界における通用の觀念に随ったものである。よって本稿では、以下、文学であるという内質の意味を込めつつ、専ら「説話」という語を用いることにする。

× × ×

説話の本質如何についての発言は多い。たとえば、『説話文学辞典』(東京堂出版)の長野晋一は、
一、「事実」または「事実」と信じられ語られてきたことを文学生化したもの。

二、文章に定着する以前には「話」として人人の口から口へと伝承された過去があるもの。

三、一気に話し終える種類の短篇のもの。

四、「創作」ではないが機械的な筆録でもなく、伝承されてきた「説話」が一人の個性によって文学化されたもの。

の四項が「(説話文学という)概念の内包する本質的な属性」だと説き、『日本の説話』(1)(東京美術)の白田甚五郎は「説話文学

の形態は短篇であり、内容は異常な人物・事物・事件が事実談と信ぜられて語られていることが、これまでの論者によって分析されていることを紹介している。しかし、これらの所説は、説話が事実談であり短篇であり伝承されるという属性を持つと述べながら、その属性を生じさせる本質への言及を怠っている。また、「説話文学は、本質的に短く完結する」との一文を持つ阿部正路の論文『日本の説話』(1)が、「短く完結する」要因(本質)の追求を欠くがごとき、あるいは、説話が短篇であるのは「一気に話し終える」ための「生理的必然にもとづく」という『説話文学辞典』(前出)が、説話は何故に「一気に話し終え」ようとするかの理由を語らないがごとき、何れをとっても説話の本質への本格的な切り込みがなされているとはいえない。

× × ×

上來概観してきたような状況に鑑みて、本稿は説話の本質を明らかにし、その概念を規定することに勉めようとするものであるが、本論に入るに先だってもう一度確認しておかなければならないことがある。それは(説話)が、近代の国文学研究者によって便宜上新しく設定されたジャンルであるということである。これは周知の事実のようでありながら、説話を古くからあったジャンルのごとく扱ふ発言が絶たないのが実状である。

たとえば「(説話は本質的に短篇となるから)(集)の形態を求めつづける」とする前記の阿部は、「したがってそれは、『古本説話集』であり、(物語)を意識することによって『今昔物語集』である」といい、(物語)を意識した『今昔物語集』と並んで(説

話)を意識した『古本説話集』という作品が古くからあったように述べているのだが、『古本説話集』などと称する作品は元來存在せず、昭和十七年に発見された無題の写本が便宜上そのように名づけられているにすぎない。そして阿部のいう「意識」に関してみるならば『古本説話集』といえども『今昔物語集』と同じく(物語)が意識されていたはずなのである。また長谷草久は「概念の曖昧な『説話』の発生とその展開こそが、日本の民族、ひいては風土性の所産と考えられる」といって、説話というジャンルの作品群に古くからの「発生とその展開」を認めている(『日本の説話』(1))ようだが、元來「概念の曖昧な『説話』」などあったわけではなく、あるのは、説話というジャンルを設定した近代の研究者が、その概念を曖昧なまま放置してきたという事実だけなのである。

× × ×

さて、国文学サイドの説話研究の端緒を開いた作品が『今昔物語集』であったということは、それが(物語)の(集)であるという点において注目に価する。まず(物語)に関していうならば、それは、説話が元來(物語)として認知されていたものであること、そして旧ジャンルである物語から異質性の故に分離独立した新ジャンルであること、したがってその本質を尋ねようとするならば物語との異質性を探ればよいこと、具体的な手段としては旧ジャンルである物語から異質分子が離脱していった後にも依然として物語の領域を守り続ける作品群(いわゆる作り物語の一群)との差異を明らかにすべきこと等を示唆するものである。

次に〈集〉についていえば、それは、説話が、〈集〉である作品（説話集）、また〈集〉をなす作品（単位話）によって物語ジャンル中における異質性を強く感得されたものであること、したがってその異質性をジャンル性として体系化するには『今昔物語集』との同質性が感得される多くの〈集〉を考察の対象として諸特性を抽出し、それらの根源に横たわる本質を尋ねればよいことを教えてくれている。

× × ×

右の教唆を得て、『今昔物語集』系の諸作品によって作り物語類とは異質な説話の特徴をあげつらねてみると、〈説話集〉としては序文・跋文・撰者の自署などがあること、また〈単位話〉としては単一な主題の奇異な事実談が乾燥した文章で直線的に展開し、短くまとめられていること、そして文学史的には、古代末期から中世前期にかけて集中的に作出されていることなどがあげられる。説話の本質は、これらの諸特徴の根源にあって、それらを誘発する必然性を秘めたものとして求められなければならないのである。

そのような主旨にそって先学の業績を見渡す時、我々は半世紀近く前の片寄正義に貴重な発見があったことを知る。すなわち『今昔物語集』の仏法部について「仏教的人生観・世界観に立つて、修善止悪の具体的事相を説明し教へてゐる」といい、また世俗部に関して「一般道德的教訓、日常時における一般的心得等の記述は、本朝部後半の世俗部に多い」とした片寄は、

この事実から今昔物語集撰者の意図中には、仏法譚を通じて

仏法伝来の知識と仏教的倫理主義とを教へようとすると同時に、一般世俗説話を通じて説話的興趣の中に、猶日常生活に於ける一般的規範、常識を教へようとする意識の存したことを察知することが出来るのである。これまで全く此の点に触れた所見を見ないのであるが、私見によれば、この点こそ見落すことの出来ない処であらうと考へる。（『今昔物語集論』と所信を表明した。）

片寄が発掘した『今昔物語集』撰者の意識を、私は『浄影維摩経疏』の

言をもつて法に對す、之をなづけて説となす。言をもつて人に對す、之をなづけて示となす。（将言對法名之為説。以言對人目之為示）

という積にしたがって〈説示〉の意識とするが、その意識に基づく説示性こそ、『今昔物語集』のみならず、これと同質の作品群（つまり説話集）をして、旧物語ジャンルと袂を分かつべき異質性を感得させ、新ジャンルとしての説話を独立させたところの根本的な性質であつたと思うのである。

一言でいえば〈説話〉とは〈説示の文学〉であるわけだが、その概念を、作り物語のそれと照応させたかたちで示すならば、作り物語が、〈何げない、虚構を、創作して、人間の、ありのままの生態や、情趣の世界を、複雑な綾の中に、織りなし描く、文学領域の言語作品〉であるに對し、説話は、〈珍しい、事実話を、用いて、人間の、あるべき生態や、備えるべき智慧を、端的に、説き示す、文学領域の言語作品〉であるということになる。

× × ×

作り物語は、もし説示意識が介在したとしても、それをあからさまに表出することをはばかるものである。しかし説話は、時にあらわな説示の語句を配してまでその立場を主張しようとする。

その説示の語句について、「説話部分」とは別の「説話に付随する部分」とする見方が一般に行われている。しかし説示の語句は、説話がその目的なものであらわに表出した部分であり、説示意図を興味深く具象化した物語的部分（説話の素体）と両面あいまって説示の文学を構築するという重要な役割を担っているのだから、まぎれもない説話の一部なのである。

右の意見には、およそ三つの疑義が寄せられることを推測する。その第一は、説示語句を伴わない説話をどのように考えるかということである。もともと、説示語句のない説話といっても、説話集に収載されているものは、序や跋に総括的な説示がなされているから問題にはならない。また、物語・日記・随筆などに組み込まれている説話は、それがその場に配置されるには、それなりの説示の契機があったからなのであって、表出自体に説示効果が期待されており、必ずしも説示語句による意図の明示を要さないのである。

第二に、右の解説中の「(説話集には)序や跋に総括的な説示がなされている」という部分に関して、序や跋のない説話集も存在することが指摘されるように思う。しかし、『今昔物語集』が完成体には程遠い作品であるという例をあげるまでもなく、序や跋を欠く説話集は未完作品と認めるべきであるから、当面の問題

に関しては考慮の外に置いてよいのである。

第三の疑義は、物語部分と説示語句とは、脈絡がたどれないばかりでなく、異和を感じさせるものまであって、両者を一体の説話と見做すことはできないというものである。しかしこのことに関しては、かつて、吉祥天女と結婚をしていながら浮気をした法師の話に、その法師を称える説示語句がある(『古本説話集』)ことを疑った高木市之助(『日本の説話』(1))に対し、「時代・社会・思想・感情など説話にもなっている諸状況への理解の不足による」ところの「疑問を起した側の説話の受け止め方に誤りがあった」のだとして修正を求めたことがあるので、ここでの再述はひかえることにする。

× × ×

説示の文学である説話は、楽しむよりは知ろうとする意識に、また情動的であるよりは理知的な関心に対応するものであるから、そのような意識・関心を満足させるためのパターンを持っている。それが、単一の主題・単純な構造・直線的な展開・乾燥した文章などといった説話の特徴としてあげられるところのものである。

また説話が、冒頭に時・所・人などを明記し、身近な事実談として実感的に語りかけようとするのも、あるいは日常的には耳目にふれにくい奇異な話材を好んで紹介しようとするのも、前記の諸特徴とともに、すべて、人々にへあるべき生感や、備えるべき智慧」を効果的に説示するという主目的に添って発現する独特のパターンであるということができよう。

そして説話には、あからさまな説示語句を配したり、同趣同類

のものを集めたりして説示効果を高める手だてがしばしば用いられることは前述したとおりであるが、それらを含めて右に列挙した諸項の一つ一つが、すべて、作り物語との異質性を感得させる因となるものであり、その各因子の根源には説示性があること、もはや疑う余地がないであろう。

× × ×

一つの説話が、いくつかの説話集や物語の類に散見するという例を見るのは、口承・書承の別を問わず説話が伝承された証拠であるとされる。そしてしばしば、説話には伝承性があるといわれる。しかし実のところは説話の伝承性の特質についての説明がなされることは稀である。伝承という事実だけに因していうならば、歌にも物語にも該当する状況がないわけではなからう。したがって、説話の伝承について特筆しようとするならば、説話固有の伝承の仕方（伝承様式）と、その様式を創出する内的必然性（伝承性）を明らかにしなければならないはずなのである。

そこでまず注意しなければならないのは、説話の伝承者は、享受した説話を、自分の主体的操作を加えずに伝えるといった機械的な伝達作業の従事者ではないということである。彼らは、享受した説話を素材として、新たな自分なりの説話に構築しなおし、それによって主体的な説示を行おうとしているのである。つまり説話は、語られ書かれるたびごとに、その語り手なり書き手なりの説示意識によって再構築されているのであり、その意味で伝承者は作者なのである。

たとえ説話の全貌が形態的にはほとんどそのまま伝えられてい

るといふ、いわゆる同文的同話にあっても右の事情は変わるものではない。伝承者は、享受した説話の総体を、自分の中に芽生えた説示意識を表出するに適した素材としてそっくり選びとり、それをもって新たな説示を行っているのである。したがって、形態は同じであっても説示意識が異なるという例が説話には珍しくないことを我々は知っている。

作り物語にあつては右のような伝承の様式はありえない。なぜなら作り物語には極めて個性的な作者が持続的に存在しているからであつて、もしそこに説話的伝承様式を介入させたとすると、伝承者は剽窃者の汚名を蒙ることになる。それに反して説話の場合、作者の個性的な説示意識に基づいて作られ伝えられた話であつても、それが享受者の手に渡つた時には原作者の個性は人間の普遍性の中に溶解して、作品は万人共通の文化遺産となる。それが（人間の、あるべき生態や、備えるべき智慧を、端的に、説き示す）説話にとつての窮極の落ち着きどころであるからである。要するに、説話の作者としての伝承者は、作品が万人の所有となることを期待して説話を世に送り出しているし、享受者も、原作者固有の作品として説話を受けとめてはいないのである。

× × ×

説話の内質、形態、そして伝承の仕方を検討してきた本稿に残されているのは、説話の史的位相に関する問題である。なぜなら説話には次のような特異な史的展開の跡がたどれるからである。

① 九世紀のはじめ、景戒によって『日本霊異記』が我が国最初の説話集として作られたが、その後は約一世紀半もの長い

期間にわたって目立った作品が出ていない。

② 十世紀の末、慶滋保胤が『日本往生極楽記』を撰ぶと、その後を受けて『法華験記』（鎮源）『続本朝往生伝』（大江匡房）『拾遺往生伝』（三善為康）その他の往生伝類が陸續と出され、また『今昔物語集』『古本説話集』なども編まれて、説話集大盛行の時期を迎える。

③ 中世に入っても説話集の盛行は続き、『宝物集』（性照）『平康頼』『発心集』（蓮胤）『鴨長明』『宇治拾遺物語』『十訓抄』『古今著聞集』（橋成季）その他の撰集が続くのであるが、無住が『沙石集』『雑談集』を編んだ十三世紀最末期ころから急速に衰退する。

説話集が右のような顕著な史的变化をとげた事情も、説話を説示の文学であると認知することによって容易に理解できよう。

『日本霊異記』の撰者景戒は、民間布教に情熱を傾けた私度僧の出で、後には仏滅後千五百年末法到来説をとる三論宗に身を置いた人であるので、自分たちの時代を「正像の二を過ぎて末法に入る」（下巻序）と恐れ、濁世の凡愚に救済の道を説示すべくこの集を編んだのであった。

ところが時代はすでに平安期に入っており、社会の体制は前代におけるような私度僧の活動を許さなくなっていたし、その上、末法の千五百年到来説も色あせていたので『日本霊異記』の路線を継承する説話集はついに出来なかった。

末法思想が底知れない恐怖となって人々の心を侵したのは、天台宗系の仏滅後二千年到来説が永承七（一〇三六）年の關黑時代突入を予告し、現実の世相が、まさにその説の正しさを立証する前兆

として受けとめられるような鬱屈感に満ちた十世紀の末ころからのことであった。そのころ、すなわち末法の世が近づいたことを歎いて泣いたという横川の源信（『神明鏡』）が『往生要集』を撰した寛和元（九六〇）年の直前に、保胤は極楽に往生した四十余人の伝を集めた『日本往生極楽記』を編んで後の往生伝類統出の緒を開いたのである。

このように説話集編集のエネルギーが、まず、仏教者の、濁世に沈溺する凡愚を安楽国に導こうとする救済の情熱に基づく説示意識によって燃え上がったものであることを忘れてはならない。したがって古い時代ほど仏教説話集が多いのだが、一方で、不安な代における賢明な処世法を説示する世俗説話集も編まれて、古代末から中世にかけての大盛行を見るようになったのである。

では説話集が十三世紀の終焉とともに姿を消してゆくのは何故か。十三世紀といえば、法然（二三〇～三三〇）親鸞（二五〇～三三〇）日蓮（二三三～三二六）一遍（三三〇～三九〇）他阿（三三〇～三九〇）ら、いわゆる中世新仏教の祖師たちが輩出して民衆仏教を弘めた画期的な時期であった。したがって、末法観に基づき劣機に生き死にの道を説示することから興った説話集の流行が、劣機をこそ正真の救済対象とする中世仏教の浸透にともない、そこに生まれた仮名法語の類に説示の主座を譲って衰退していったのは、思えば当然の成行きであったのである。

追記 本稿は、拙稿「説話文学試論」（『論纂・説話と説話文学』笠間書院）と重なるところが多く、また『今昔物語集』の不成立をめぐって（『説話文学研究』昭五二・六）とも関る。併せて参看されたい。（今成元昭）

上代の説話

〔**範囲**〕 説話は狭義には神話や伝説を除外するが、広義にはこれらを含めて口頭伝承による「はなし」、及びそれらを文字化したものの総称である。上代文学において説話を取りあげられる場合は一般に広義にこれを解する。したがってその資料は、『古事記』『日本書紀』『風土記』を挙げることができる。また奈良時代以後の成立ではあるが、『古語拾遺』や『高橋氏文』も記紀と同様の性質を持った説話資料である。さらにまた『日本霊異記』も平安初期に成立した説話集であるが、内容の多くが奈良時代の事柄である点から上代説話の資料となる。さらに目を転ずると『万葉集』も歌集ではあるが、歌自体に説話的内容を含んでいるものがあり、あるいは説話から受けた詠嘆を表現しているものもあることによつて、説話考察の資料となし得る。同様のことは『懐風藻』の詩のあるものについても言うことができる。

〔**特色**〕 上代の説話が説話である以上、その本質において他の時代の説話と共通な性質を持つことは当然であるが、一方、上代説話は他の時代にみられない特色を持っている。それは端的に言えば、説話ないし説話文学の発生期の持つ特色であつて、神話の顔落によつて生じた諸形式である。

先に説話は広義には神話・伝説を含むと述べたが、神話が生きて機能している時代には、人々の文学的欲求をみたす形式としての狭義の説話は存在しなかった。その時代における口頭伝承は

「語りごと」であり、律調を有するハレの言葉であつて、日常の会話の言語であるケの言葉によつて語られる「はなし」が語り伝えられる対象になることはなかった。語り伝えられるものにはそれだけの価値がある。神話は信じなければならず伝えなければならぬところの、ある聖なる価値を持っていた。その言葉は、聖なる価値を示すために日常の言語とは異質なハレの言葉でなければならなかった。呪力ある言葉である。また伝承される便宜のためにも律調を持つハレの言葉のほうが適切であつた。かくして神話の言語は日常の言語と異なる。しかし狭義の説話は神話のような聖なる価値を持たない。内容それ自体のおもしろさが説話の価値であつて、内容への興味によつて説話は伝承される。すべてが、あるいは生きることについての必要な部分が神々の手によつて律せられている時代に、人間の生についての興味、あるいはそれを表現することのおもしろさが、神々を離れてあり得ないことは自明の理である。狭義の説話は神話の衰頹より始まる。

〔**神話から説話へ**〕 内容それ自体への興味、すなわち事柄のおもしろさが言語によつて表現されるということは、それこそが自覚的に文学を創造することである。かくして上代の説話は、文学の未分化の母体であるところの呪的祭式の中で、あるいはその周縁で語られていた神話や語りごとから文学が分化してゆく過程や状態の、一つの道筋を表している。これが上代説話の特色である。しかしこのことは、分化したものが神話より高い文学性を持つことを意味しない。かえつてより低次元な素朴な文学性をしか持たないことも多い。神話の内にも高い文学性があり得るからである。しかしその文学性は自からなる結果であつて、人々はその中で無

自覚に人間に本然の文学的欲求を充足させていたのである。

呪的祭式や信仰の衰退あるいは消滅に伴って、神話は変質する。聖なる価値は頹落し消滅し、その内部に潜在していた内容への興味、表現の喜びが顕在化し露出する。そしてある神話は興味の稀薄さのために消失し、ある神話は存在し続ける。またあるものは改作されて興味を増しながら伝説化し、さらに説話化する。また文字化されてゆく際には大陸文化の影響や記載者の個性を反映した作品になってゆく。

『出雲国風土記』の八束水臣津野命やつかみづののみことの国引きの詞章は莊重な律調を有する繰り返しの多いハレの言葉で語られたものであるが、これは出雲の国土創造を語る神話が信仰性・規範性を喪失しながら、外形は神話の形式を保って残ったものと思われる。この神は出雲国で天下所造の大神として尊ばれていたわけではないから、『風土記』撰進当時の出雲の国で神話として生きていたのではない。過去に神話であったものが、その比喩のイメージの豊かさ、島々を引き寄せるといふ発想のユニークさと共に、詞章の持つ韻律の美しさによって残ったのである。しかし、多くの神話は、その頹落した形として、語りごとの詞章をば留めず、ある事柄の起源を述べる簡単な説話として残る。上代説話といわれるものの多くがこの形であって、神話の聖性の抜け殻であり、文学性は高くない。記紀のいわゆる神話・伝説、あるいは『風土記』の特に地名起源説話は、この類。(ただし、『古事記』には特殊な性格がある)ので単純に上記の説話と一緒にできない部分がある)

またたとえば、『丹後国風土記』逸文の浦喚子の伝説は、もとは神と人間との婚姻を語る神話だったと思われるが、『風土記』

においては日下部氏の祖先伝承となっており、旧国守伊予部馬養連の記したものに背いていないと述べてあることから、かつての土地の伝説が、記録者馬養によって漢文の修飾や短歌の挿入を受けて記載文芸化されたことを示している。

このように上代の説話は、ハレの言葉で語られた語りごとから脱化したものが多い。

《説話の機能》 上代にいち早く成立した文学の形式(ジャンル)は歌すなわち抒情詩であった。ということは、人々の文学的欲求は歌の持つ種々な詩形と機能とによって略々充足されていたことを示す。(かつての語りごとがその延長線上に叙事詩的文学を成立させず、多くは断片的な、そして文学性の稀薄な説話に頹落していったことについては別に考えるべき問題が多いが省略する)。しかし一方では抒情詩によっては充足し得ぬ状況が八世紀の律令制社会には生まれつつあった。租税負担の苦しみ、官命による長途の旅、親子の絆をも分断する律令的道德等々、新しい人生の悲苦が生じたのである。それらの一部は万葉集の歌にも取り込まれたが所詮歌の機能の外であった。人々は巷間の噂、語り継がれる「はなし」として、これらの悲苦を語った。奈良時代後半の社会は、「はなし」が社会的蓄積となって、新しい文学的形象の方法を求めて模索していた時代であった。しかし文学的形象化より早く宗教的な救いを示すためにこれらの「はなし」が組織された。『日本霊異記』がそれである。「はなし」すなわち説話は、人々の文学的欲求をみだす低次元形式である点で文学の基盤であるが、それと共に人々が生きて行く上での実用的機能をも果たすものであることを、この事が示している。

(金井清一)

中古の説話

主要作品についてはそれぞれの項目で詳しく述べられるはずであるから、ここでは有名ならざる作品を中心に大まかな展望を試みることにしたい。

説話はさまざまなジャンルの文学作品にさまざまな形で投影したり吸収されたりしているが、もっとも端的に説話を捉え、記録することによって独自の作品世界を形成しているのは説話集である。したがって「中古の説話」研究においても説話集が主たる研究対象とされることは言うまでもない。ことに研究史の初期においては説話研究は説話集研究とほとんど同義語のように考えられ、説話集はまた説話文学とほとんど同義語であったから、研究の対象ももっぱら説話集ないしそれに類する作品に限られがちであった。

たとえば野村八良『近古時代説話文学論』（明治書院、昭10。芸林舎より昭51復刊）は戦前においてもっとも広く網羅的に説話文学作品を展望した優れた研究書であるが、同書が「中古時代説話文学概観」の項で扱った作品は、『日本靈異記』（関連作品として『法華験記』『日本感靈録』『本朝神仙伝』に言及、『大和物語』『三宝絵詞』『地藏菩薩靈験記』『打聞集』『今昔物語集』）であり、この他に「其の他の諸書」として一括して記述されているのが『江談抄』『無名抄（俊頼髓脳）』、『和歌童蒙抄』、『袋草紙』、『大鏡』、『今鏡』である。これにより当時の研究者たちが視界に捉えてい

た中古の説話文学およびその関連作品の全体像をうかがうことができるだろう。

これを現在の研究動向と対比してみると、その後の研究史で特筆すべきは研究対象のいちじるしい拡大であった。その一端はこの本の目次を一覧するだけでも明らかに読み取れるはずである。

たとえば『日本往生極楽記』や『続本朝往生伝』など一群の往生伝は、現在ではごく一般的な文学史においても当然のように位置を与えられているが、これらが文学研究の対象とされるようになったのは昭和三十年代も末のことであった。その後、往生伝は説話文学の特殊な一部門として見られるようになり、多くの優れた研究を生み出していることは往生伝関係の各項に述べられる通りである。

これよりもやや早く発掘・注目されるようになった作品群に平安初期の怪異説話集がある。『紀家怪異実録』（紀長谷雄）や『善家秘記（異記・異説ともいう）』（三善清行）がそれであるが、ともに散佚作品で、前者は『高野大師御広伝』に一条、後者は『扶桑略記』に二条と『政事要略』に三条の佚文を残すにすぎない。しかし、これらの説話が後代の作品と意外に太い糸でつながっていることは今野達が指摘する通りであり、また単一の説話を詳しく記した書も広い意味での同類と考えるならば、『浦島子伝』、『続浦島子伝』、『白箸翁伝』などを挙げることができる。しかも、これら漢文で書かれた世俗怪異説話集が『搜神記』など中国六朝の志怪小説の類に触発されて成ったことは、仏教説話集の始発点となった『日本靈異記』が中国の『冥報記』や『金剛般若集験記』を意識していたのと通い合うところがある。つまり中古の説

話文学の流れは、仏教説話・世俗説話ともに多かれ少なかれ中国の作品の模倣ないし影響下に出発したものが、種々の曲折を経ながら独自の方法を模索し、院政期に至ってついに時代を代表する文学として盛行する、生成発展の歴史として捉えることができるのである。

これを文体の側面からいえば、漢文で出発し、やがて変体漢文や平仮名文、漢字片仮名まじり文へと展開する多彩な文体生成史であった。なかでも漢字片仮名まじり文は、主として王朝女流文学の世界ではぐくまれた平仮名文とは対照的に、男性たちに親しい漢文訓読の世界で発生し、『今昔物語集』や『打聞集』を生むなど、とりわけ説話との深い関連の中で発達した文体として注目されるが、この文体の生成史に新しい展望をもたらした『東大寺諷誦文稿』や『百座法談抄』など、説教や唱導に關係の深い文献が文学として注目されるようになったのも近年のことに属する。

こうして説話の探索や伝承の実態をさぐる試みは説話集という狭いわく内にとどまらず、歌論書や歴史物語などの文学書をも越えて、男性貴族日記や仏教關係の記録などあらゆる資料について行われるようになった。九条兼実の日記『玉葉』に口承説話の実態をさぐった益田勝実「話の生熊―社会性の問題―」（『解釈と鑑賞』昭34・6）はその代表的な成果であり、永井義憲「今昔物語の作者と成立」（『大正大学研究紀要』第50号、昭40・3）は、右の益田論文が『玉葉』で注目したのと同じ説話が新義真言宗の宗祖寛鑲の講説の聞き書きである（『真言宗談義聴聞集（寛鑲上人打聞集）』

にも記録されていることを指摘し、教団内部の講經・講学關係資料にも探索の必要があることを明らかにしている。

こうした動きとも関連して最近とみに注目を集めている『中外抄』と『富家語』は、ともに知足院関白藤原忠実の談話を筆録したもので、有職故実の知識伝授の色彩が濃く、説話集というにはためられるが、実際に口頭で語られた話の記録であるし、『古事談』や『続古事談』がこれらの書に少なからぬ話を取材していることもあって、大江匡房の談話筆記として有名な『江談抄』とは語り手の家柄や資質、背景となった時代の状況など、さまざまな点で性格の異なる作品として貴重な価値を認められている。

各説話集の出版關係についての追究が進んだ結果、従来さほど重要視されなかった小さな説話集が改めて見直されるようになった例もある。近年京都の東寺で従来は欠巻とされていた下巻を備えた古写本が発見され話題になった『注好選』は、『今昔』や『私聚百因縁集』との緊密な關係が改めて注目され、名古屋大学文学部の小林文庫に唯一の写本が伝わる『百因縁集』（私聚百因縁集とは別の作品）は、『今昔』および『三国伝記』との親しい關係が指摘されて関心を集めている。

このように中古の説話を見る目は著しく視野を広げつつあり、こうした裾野の広がりによって『日本靈異記』や『今昔』など主要作品についての研究も一層多角的に進められているわけだが、詳細はそれぞれの作品の項に譲りたい。

（池上洵一）